中国人技術研修生の日本語研修
―東京商工会議所委託プログラムに参加して―

佐藤尚子

［１］　はじめに

平成５年１月７日から２月27日まで、千葉県幕張の財団法人海外技術者研修協会（ＯＶＴＡ）でおこなわれた東京商工会議所委託日本語研修に参加し、中国人技術研修生13名に日本語を教える機会を得た。[1] ここに技術研修生を対象としたプログラムの一例として、このプログラムの内容と問題点について報告したい。

［２］　学習者について（表１参照）

中国国際人材交流協会から派遣された男性13名
出身地　北京
年　齢　27～34歳
学　歴　大学卒　２名、高専卒　１名、高校卒　10名
職　業　北京の自動車工場や鍍金工場に勤務する中堅技術者
外国語　ほとんど全員が中国語しかできない
日本語研修終了後、平成５年３月から12月まで10か月間日本の企業で研修を受けた。

［３］　来日前の日本語学習について（表１、２参照）

12名は北京市経済センターの研修センターで、中国人教師から、３か月間にわたり、１日６時間の授業を週５日受けた。しかし、そのうち１名（学習者番号７。以下、学習者７のように記す。）は仕事の都合で途中で抜けた。仕事の都合で研修センターへ行けなかった１名（学習者３）は工場で中国人の通訳から個人指導を受けた。

３か月の研修以前に日本語を学習したことがある人は１名（学習者10）だけ

表1

学習者番号	年齢	学歴	中国での職務内容	日本での研修内容
1	３２	普通高校卒	溶接	被覆アーク溶接
2	２８	普通高校卒	溶接	被覆アーク溶接
3	３３	普通高校卒	溶接	被覆アーク溶接
4	３４	大学卒	自動車設計	プレス加工
5	３４	普通高校卒	プレス加工	プレス加工
6	３２	大学卒	電気鍍金	電気鍍金
7	３０	普通高校卒	電気鍍金	電気鍍金
8	２７	普通高校卒	木工	木枠木箱製作
9	２９	普通高校卒	木工	木枠木箱製作
10	２８	工業高校卒	電気工事	電気配線工事
11	３４	高専卒	電気鍍金	電気鍍金・亜鉛鍍金
12	３４	工業高校卒	電気鍍金	電気鍍金・亜鉛鍍金
13	２７	普通高校卒	電気工事	電気設備工事

だった。しかし、この人も自分でテープを聴いて学習するなど独学で、来日するまで日本人とは話したことがなかった。

問題点

1　日本で使用する教科書『新日本語の基礎Ⅰ』を北京に送り、来日前にそれを使って研修をおこなうということであったが、実際は中国人教師が『新日本語の基礎Ⅰ』では、教えられないという理由で、『中日交流　標準日本語初級1』が使われていた。運用力をつける練習よりも、中国語による説明のほうが多かったようで、て形などの形づくりはできるが、発話力が弱かった。

2　中国人教師の発音に問題があったのだろうか、来日時にはほとんどの人が「か」と「が」の区別ができず、疑問文を書かせると、「田中さんは先生ですが。」と書く状態だった。全体的に聴く力が劣り、日本での学習では聴きとりの練習に多くの時間をさくことになってしまった。

3　10名は『中日交流　標準日本語　初級1』を3か月で終えていたが、仕事の都合で1名（学習者3）は7割程度、1名（学習者7）3割程度しか終えてなかった。また、1名（学習者9）は中国でおこなわれた日本語学習についていけず、半分ぐらいまでしか学習していなかった。

13名の来日時の面接の結果は次のようであった。

ひらがなが全部または大体読める　10名
〃　　書ける　9名
カタカナが全部または大体読める　6名
〃　　書ける　4名

日本の漢字の読み書きについては11名が「勉強したものはわかる」または「少しわかる」と答えた。[2]

面接時におこなわれた日本語を使った質問に対して、反応したのは8名。（学習者2、4、5、6、8、10、12、13）そのうち、自分の日本語学習歴や研修する日本の会社名が答えられたのは2名（学習者8、10）だけだった。中国で暗記させられてきたらしく、ほとんどの人が「日本語を3か月しか勉強しませんでしたから、まだ下手です。」と質問とは関係なく答えた。日本語では通じない人には通訳を介して質問をした。

表2　来日時の日本語力

学習者番号	読み書き能力					会話力、即応力ほか
	ひらがな		カタカナ		漢字	
	読み	書き	読み	書き		
1	大体可	少し可	不可	不可	不可	日本語の質問に全く答えられない
2	大体可	可	少し可	不可	可	「ゆっくりいってください」など発話ができる
3	少し可	少し可	不可	不可	可	仕事の都合で個人指導で学習 日本語の音が全く聴きとれない
4	可	可	可	大体可	可	聴きとりは少しできるが、答え方がわからない
5	可	大体可	可	可	可	質問に何とか答えられる
6	可	可	可	少し可	可	「ゆっくり話してください」など発話ができる
7	直音のみ可	直音のみ可	不可	不可	可	質問に全く答えられない 仕事の都合で教科書は3割しかやっていない

8	可	可	可	可	可	質問に答えられる 自分が研修する会社名が言える
9	拾い読み程度	可	不可	不可	不可	中国での日本語学習についていけず、教科書は5割しか終わっていない　質問に答えられない
10	可	可	可	可	可	中国での日本語研修以前に1年独習　質問に答えられる
11	大体可	可	直音は可	不可	可	日本語の質問に答えられない
12	可	少し可	可	少し可	可	自分から話そうとする
13	大体可	大体可	少し可	少し可	可	質問が聴きとれない 自分から少しは話そうとする

注）日本の漢字の読み書きについて「勉強したものはわかる」または「少しわかる」と答えた場合は「可」とした。

［4］　日本での授業の内容

授業時間　総時間数　２１３時間

月曜日～金曜日　９：30～12：30　　１：30～４：30

土曜日　　９：30～12：30

（日本語の授業のほかに、日本事情についての授業や工場見学も含む）

教　　師　日本語の授業は４人で担当

使用教材　『新日本語の基礎Ⅰ』漢字かなまじり版、中国語訳

（（財）海外技術者研修協会編）

『日本語基礎問題集　日本語基礎テスト問題集』

『日本語基礎問題集　日本語基礎文型練習帳』

『日本語基礎問題集　日本語基礎練習問題集』

（ＫＣＰインターナショナル語学研修院編）

『じっせんにほんご　技術研修編』本冊、かなワークブック

（（社）国際日本語普及協会著）

実際の授業は表３のようなスケジュールでおこなわれた。（表３参照）

具体的な授業の内容は次のとおりである。

＜文字＞

ひらがな、カタカナについては『じっせんにほんご　技術研修編　かなワークブック』を使用した。だいたいの学習者が清音、濁音は習得していたので、促音、拗音、長音など特殊な音に対する指導に重点をおいた。また、文字指導といっしょに発音指導をおこなった。

漢字については『新日本語の基礎Ⅰ』の各課ごとに新出語彙を漢字で書いたフラッシュ・カードを作り、読みを中心に漢字の指導をおこなった。書きの練習は各自にまかせた。

「生活の中の文字」は『じっせんにほんご　技術研修編』本冊の付録にある「生活の中の文字」をフラッシュ・カードにし、読みの練習と意味の把握をさせた。

＜文法・会話＞

前半は『新日本語の基礎Ⅰ』を使用し、後半は『新日本語の基礎Ⅰ』と『じっせんにほんご　技術研修編』を併用した。来日前に文法はかなり学習してきていたので、このプログラムでは聴く力、話す力の養成に重点をおいた。

『新日本語の基礎Ⅰ』は多くのところで使われていて、よく知られている教科書である。ここでは併用された『じっせんにほんご　技術研修編』について少しふれたい。

表3

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
			平成5年 1月7日	8日	9日
			開講式 面接	ワ 1-5課 基 1課	ワ 1-5課 基 1/2課
11日	12日	13日	14日	15日	16日
ワ 6課 基 2/3課	ワ 7課 基 3課	ワ 8課 基 4課 --- 日本事情	ワ 9課 基 4/5課	成人の日	ワ 10課 基 5課
18日	19日	20日	21日	22日	23日
ワ 11課 基 5/6課	ワ 12課 基 6課	工場見学 --- ワ 13課 基 6/7課	ワ 14課 基 7課	ワ 15課 基 7/8課	ワ 16課 基 8課
25日	26日	27日	28日	29日	30日
ワ 17課 基 8/9課 漢 1課	ワ 18課 基 9課 漢 2課	基 10課 漢 3課 --- 日本事情	基 10課 漢 4課	基 11課 漢 5課	基 11課 じ 1課 漢 6課

2月1日	2日	3日	4日	5日	6日
基 11/12課 じ 2課 漢 7課	基 12課 じ 3課 漢 8課	基1-10課 試験 じ 4課 漢 8課 --- 施設見学	基 12/13課 じ 5課 漢 9課	基 13課 じ 6課 漢 10課	基 13課 じ 7課 漢 10課
8日	9日	10日	11日	12日	13日
基 14課 じ 8課 漢 11課	基 14/15課 漢 11課	じ 9/10課 漢 12課 --- 日本事情	建国 記念日	基 15課 じ 11課 漢 12課	じ 12課 漢 13課
15日	16日	17日	18日	19日	20日
基 15/16課 じ 13課 漢 14課	基 16課 じ 14課 漢 14課	作文指導 生活の中の文字 --- 施設見学	基 17課 じ 15課 生活の中の文字	基 17課 じ 16課 漢 15課	基 17課 じ 17課 漢 15課

22日	23日	24日	25日	26日	27日
じ 18課 復習	じ 19課 復習	じ 20課 復習 --------- 日本事情	復習	復習	成果 発表会 閉講式

注）表３の略号は次のものをさす。

ワ　『じっせんにほんご　技術研修編』かなワークブック

基　『新日本語の基礎Ｉ』漢字かなまじり版

じ　『じっせんにほんご　技術研修編』本冊

漢　『新日本語の基礎Ｉ』の中にでてきた漢字

（138ページより続く）

『じっせんにほんご　技術研修編』は技術研修生を対象とし、60時間の短期集中の日本語教育用として開発されたものである。コミュニケーションに必要な基礎的な聴く力、話す力をつけることを指導目標とし、文法的な構文力をつける、正しく言えることよりも、場面に即応して通じることに重点がおかれている。具体的にいえば、①日本語の音に慣れる②自分に必要な情報を聞き取り、行動に移す。または、自分の意志を伝えるの２点である。短期の学習時間で実践的運用力をつけることを目標としているので、文型積み上げ方式ではない。初めから丁寧体だけでなく、普通体や省略体、くだけた表現も使われている。

このテキストを使用して、得られる成果としてあげられることは、相手の日本人の話している日本語が、わかってもわからなくても反応する、即応力がつくことである。相手が「おはよう」といえば、「おはよう」「おはようございます」といえ、なにか頼んでいるようであれば、ともかく「はい」といって駆けつけるという具合である。「返事がいい」という表現があるが、職場において相手が言ったことに対して黙っていると、相手が不快に思い、人間関係に悪影響をおよぼすことになる場合もしばしばある。外国人の場合、それは相手の日本人が言っていることの意味が理解できない場合がほとんどであると思われ

るが、忙しい職場ではそのようなことはなかなか許されない。多くの日本人雇用主が望んでいることは、じょうずに話せなくてもいいから、雇用主、上司、同僚からの指示が理解でき、行動できること（例えば、「○○をとってくれ」といったら、すぐとることができる）、あいさつができること、緊急時の指示が理解できること（例えば、「危ない」といわれたときに、即座によけるなどの適切な行動がとれる）である。技術研修の場で即応力は必要不可欠のものである。『じっせんにほんご　技術研修編』を使うことによって、かなり即応力がつくのである。（ただし、文型積み上げ方式をとっていないため、体系的に日本語を学ぶことはできない。体系的に学習したい場合には、他の教材が必要である。）

＜復習＞

最終週は企業で研修をおこなう場合に最低限習得しておく必要のある、下記の項目だけに内容を絞り、その練習を繰り返しおこなった。

1. それぞれの場面にふさわしいあいさつができる。（朝・昼・晩、相手が上司か、同僚か、など）
2. 自己紹介ができる。また、日本人から質問されても、答えられるように、疑問詞の復習をかねて、Ｑ＆Ａをたくさんおこなう。
3. 依頼、命令の表現が確実に理解でき、行動できるようにＴＰＲ（Total Physical Response：全身反応学習）教授法を使って練習する。
   練習する際に使用した語彙はつぎのものである。
   文型：～て、～てくれ、～てください、命令表現（来い、しろ、など）
   動詞：書く、行く、来る、置く、とる、座る、止める、つける、消す、開ける、閉める、入る、出る、触る
   位置の表現：上、下、中、外
   副詞：早く、もっと早く
   数詞：１つ、２つ……、～枚、～本
4. 禁止、緊急時の指示が理解できるようにする。
   依頼、命令の表現の中に適宜おりこんで、練習する。
   文型：～ないで、～ないでくれ、～ないでください
   禁止表現（入るな、触るな、など）
   表現：危ない、だめだよ

5. 場所をきくことができる。

次のパターンを練習した。

生徒：すみませんが、○○はどこですか。

教師：○○です。（丁寧体）／○○。（普通体、省略）

生徒：ありがとうございました。

練習に使った場所、もの

郵便局、～駅、バス乗り場、お手洗い、～売り場、電話、工具、社長さん、～さん、など

6. 相手に許可を求めることができる。

文型：～てもいいですか。

（て形が使えない学習者の場合は）～たいです。いいですか。

＜成果発表会、作文指導＞

日本語研修の最終日に日本語学習の成果をみせる成果発表会が設けられた。本来ならば、それぞれが自由に口頭で、自己紹介なり、研修の感想なりを述べるべきものであるが、２か月の研修ではそこまでできるようにするのは大変むずかしいことである。そのため、成果発表会のスピーチの原稿作りをかねて、作文を書かせ、それを暗記させて、発表させた。また、作文は文集にまとめ、この研修の記念とした。

問題点

(1) １日の研修時間が長すぎ、教師、学習者共に集中力が持続できなかった。このプログラムの研修時間は研修企画者の、「日本では９時から５時までの８時間労働がふつうであるから、日本語研修の段階からそれを学習者にわからせておく必要がある」という考えから決められたものである。

(2) 中国人は一般的に文字を介した読み書きによる学習は得意であるが、聴く、話すという音を媒介とした言語活動は不得意な場合が多い。今回も２名（学習者８、10）を除いた11名にそのような傾向がみられ、『新日本語の基礎Ｉ』の授業ではいきいきとしている学習者が、『じっせんにほんご　技術研修編』の授業では緊張し、ふつうでは言えるのにそのときには言えなくなってしまうということがしばしばあった。11名にとって『じっせんにほんご　技術研修編』の授業はかなりきびしいものであ

ったようだ。

(3) 聴く力は来日時は弱くても、日本語の音に耳が慣れるに従って、聴く力が高まるというのが一般的である。そして、それとともに日本語に対する理解力も高まると筆者は考えてきた。しかし、今回の場合、学習者１、３、７、９の４名は最後まで日本語の音に弱く、日本語の習得に困難をきわめた。しかし、弱いといっても、４名の問題点は異なる。学習者７、９は当初から文字、文法などすべての面に理解度が低く、音声面だけが特別劣っているわけではない。学習者１はとらえようとはするが、１音ずつしか認識できず、１語ずつまとまったものとしてとらえられない。例えば、「あした」といったときに、語頭の「あ」にばかりとらわれてしまい、「あした」という１語ではなかなかとらえられない。また、日本語の音を聴いて、リピートしたときに正しく発音できない。学習者３は最初の１か月は順調に伸びたが、そこで彼の理解力の限界がきてしまったようでそれ以降、あらゆる面で日本語に対する拒否反応がでてしまった。特に、音声面でそれが強く、いろいろ質問しても「頭が痛い」というばかりであった。学習者７、９のようなケースはよくみられることであるが、学習者１、３のようなケースは個別に時間をかけて指導すれば改善するとは思われる。しかし、短期集中のクラス授業の中でどのように対処していけばよいのか、その方法を考える必要がある。

(4) この13名の学習者は日本語研修の２か月ほとんど宿舎から出ず、同じ建物の中にある教室、宿舎、食堂を行ったり来たりしているだけだった。技術研修生の場合、金銭的な問題もあるが、中国人は慎重な人が多く、あまり積極的に外出しないようである。このため、学習した日本語を使う機会も、また、教師以外の日本人の日本語を聴く機会も極端に少なく、日本語力の伸びの点でマイナスになったと思われる。

(5) 学習者の中には、日本人も漢字を使うので、話せなくても筆談でなんとかなると安易に考えていた人もいたようである。（実際、企業に研修に行ってみると、日本人が思っていたほど漢字を知らなくて驚いたと言っている研修生がいた。）

（(2)(4)(5)は中国人特有の問題点である。）

［5］　おわりに

この研修生たちは、研修期間を延長した5名を除いて、平成5年12月27日に帰国した。筆者は5月と帰国前日の12月26日にそのうちの半数に会う機会を得た。聴く力が弱かった4名について、どうなっているか心配であった。しかし、学習者1、7、9に会ったかぎりでは、かなり聴く力はついており、こちらの質問にも反応できるようになっていたが、それに適切に答えられる構文力はなかった。また、研修で習った日本語と実際に研修企業で使われている日本語が違い、驚いたという感想がおおくよせられた。

表3にあげた日本語研修の内容は研修の開始以前にすべて決められたものではなく、学習者の様子をみながら、修正したところがかなりある。3)『じっせんにほんご　技術研修編』の使用は、中国人の学習者にとってはきびしいものであったかもしれないが、技術研修という点からみれば現場のニーズに適した教材の選択であったと思う。

このプログラムでの経験を今後の日本語教育の現場に役立てていきたい。

注

1）　筆者は平成5年7月から千葉大学の専任教官である。

2）　自己申告およびフラッシュ・カードをみせておこなった簡単なテストの結果である。

3）　ここに載せたものは学習者の様子をみて、手直しを加えた最終版である。

参考文献

（社）国際日本語普及教会　1993　「新刊書紹介　じっせんにほんご」
（『ＡＪＡＬＴ』16号）